

柴田鍊三郎

浪人列伝

浪天列

伍

柴田鍊三郎

文藝春秋

文藝春秋

文藝春秋



浪 人 列 伝

鍊

昭和四十四年十二月二十日 第一刷

定価 四三〇円

著 者 柴田鍊三郎 しばた れんざぶろう

発行者 檜原 雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

郵便番号一〇二

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1969 Renzaburo Shibata

Printed in Japan

目次

誤説浪人	幕末浪人	発明浪人	乞食浪人	学問浪人	仇討浪人	片腕浪人	どもり浪人	妄執浪人	血まみれ浪人
------	------	------	------	------	------	------	-------	------	--------

二二三	一九九	一七七	一五三	一二九	一〇三	七九	五五	二九	五
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	---

装帧
三井永


浪人列伝

血まみれ浪人

一

武辺ぶへん、という言葉が、生きていた時代であった。

寛永十六年四月十六日、会津藩四十万石加藤式部少輔明成の家臣堀主水は、一族郎党二百余人をひきつれて、若松城下から、退散した。

その途中、城下はずれの間川橋くらかわを渡るや、橋上に薪まきを積んで、焼きはらい、次いで、家臣百人に鉄砲てつぽうを揃そろえさせて、城へ向って、撃ちかけさせ、

「武辺の面目、これにあるぞ」

と、うそぶきすてて、悠々と馬を進めて、姿を消し去った。

堀主水は、三千石の知行を取り、家老職にあった。

主水が、先主左馬介嘉明に仕えた時は、微禄であった。大坂夏の陣に、嘉明が、敵数騎に包囲され、あわやという際、主水は、身をすててこれを救い、この功で、金の采配を受け、侍大將になり、会津移封とともに家老職に就いたのであった。

嘉明は、寛永八年六十九歳で卒し、嫡男式部少輔明成が、あとを嗣いだ^つが、父の剛氣を享^きけてはいたが、父の度量をもらっていなかった。

堀主水も剛氣の士であったが、明成が父嘉明と比べて、あまりに見劣りするのが、氣に食わず、それを態度に露骨に示したので、明成の憎惡を買った。

左馬介嘉明は、沈勇にして、才智を面に現さず、放胆不敵の武將であるとともに、自ら仁徳を備えることに努力した人物であった。嘉明は、慶長年間に入手した南京皿十枚を秘藏していた。世に謂^いう虫喰南京で、藍色土目など見事な出来ばえで、その秘藏はひろく知られていた。ある時、遠来の客があつて、この皿十枚を饗応の膳部にのせることにしたが、その際、近習の一人が、あやまって、その一枚を、とり落して割ってしまった。

近習が、恐懼^{きょうぐ}して、切腹して詫^わびようとしていることを、嘉明は耳にするや、すぐに呼び出し、

「過失は、誰にでもあることだ。生命を無駄にするな」

と云って、面前で、残り九枚を、手刀で打ち割った。

まわりの者が愕然がくぜんとなると、嘉明は、笑って、

「この皿九枚が、のちのちまで残って居れば、一枚は粗相そそうによって割ったのだ、という話題のこるであろう。たとえ珍重すべき名器であっても、家臣の名と生命には替えがたい。わしには、主人たる者の心得はある」

と、云った。

明成には、こうした寛容さはなかった。そして、堀主水には、先君に見劣りする当主に対して、忠誠心が欠けていた。

お家大事、という尽忠の奉公精神は、まだこの時代には、確立していなかった、といえる。

堀主水は、加藤左馬介嘉明という人物に心服して、働いたのであって、加藤家という主家のために、一身をなげうつ気持は稀薄であった。

したがって、明成が尊敬できぬ当主であれば、主水は、おのが心をいつわることができなかった。後世のさむらいと比べて、正直で率直であったといえる。

某日、領主と家臣は、些細ささいな事柄から、平素の忿懣ふんまんと侮蔑ぶべつが爆発した。明成は、思わず、小姓の手から差料をつかみとって、手討ちの身構えになったし、主水の方は、斬ってみる、と膝

を立て、肩をいからせた。

重臣たちが、あわてて、とどめて、その場は事なきを得たが、爾来、領主と家臣は、一切口をきかなくなった。

明成が、主水の留守をねらって、近習をはしらせ、主水宅の書院から、先主嘉明から賜った金の采配を奪わせたのは、口をきかなくなってから半年ばかり経った頃であった。少年の喧嘩にも似た、いかにも大人げないやりかたであったが、主水は、我慢しなかった。

そして、ついに、主水の出奔という結果を招いたのである。

当然、明成は、憤怒した。

憤怒がいかに度を越したものであったか、主水出奔時に江戸に在った明成が、その報に接するや、直ちに会津に帰国したのでも、明らかであった。

明成は、主水行方搜索に、五十人の追手を出した。主水は、その追求の手をのがれて、高野山に籠った。

明成は、主水が高野山に在る、と知るや、幕府に対して、たとえ四十万石とひき替えても、主水の身柄を、高野山からひきずりおろして、渡して頂けるように、と願い出た。

これを知った主水の方も、大目付井上筑後守政重に、左の七箇条を挙げて、出訴した。

一、明成もっぱら叛逆を企て、曾て豊臣秀頼に款を通ぜし事あり

一、加藤家もとより故太閤の恩を受くることの深きを以て、大坂落城の際、明成落涙せしのみならず、剃髪せんとす、その志決して浅きにあらざる事

一、口を忠貞に藉り、事を警衛に托して兵を教練せし事

一、会津城を改築せし事

一、他領往來の諸口を警固にし、殊に出羽の境檜原に新関を設け、常に郷兵十騎を置ける事ひとつひとつを、よく調べれば、大した事柄ではなく、咎めなければならぬ罪ではないことは、明白であつた。憎惡のあまりの叫びがかりに過ぎなかつた。

二

主水は、出訴してほどなく、幕府の手で逮捕され、江戸表へ押送されて、取調べの上、会津藩へ、引きわたされた。

幕府の判決は、左のようなものであつた。

『主従は、義を以て結ばずんば、その親しみを久しゅうすべからず。あるいは、主の惡きを見て、諫むといえども、聴かざれば、之を去るは、世にあえてその例なきに非ざるも、しかも、主にして隱謀まぎれなく、止むを得ずんば、身をすてて極諫し、あるいは主の前

に自殺するも忠臣の義なり。しかるに、主水は、その主に叛くのみならず、あまつさえその悪を訴う。その行うところ、義に合い道に適すと云うべからず。されば、その罪、主水にあるを以て、明成ねがいのごとく、主水及びその弟兩人を引渡して、およそ臣たる者、その礼にもとる時は、天鑑その罪を許さざることを知らしむべし』

寛永十八年三月十五日、堀主水は、斯くして、明成の命令によって、死罪に処せられた。

しかし、事は、それだけで、済まなかった。

幕府にとって、豊臣家旧臣であった加藤家を取りつぶすに、これは、絶好の口実であった。

当主明成自身、たとえ四十万石とひき替えても、堀主水の首を所望する、と明言したのである。幕府の狡猾巧妙な工作が為され、加藤明成は、しだいに、網をしばられて身動きならなくなり、ついに、

「病軀、大藩の任に堪えず」

として、四十万石還納を願ひ出た。

すでに、そうなる以前に、家中は、主君の激怒を是とする派と、封土を失ってまでもおのが一個の意気地を通そうとすることに批判の立場をとる派と、二つに割れていた。

しかし、両派とも、よもや主君が、四十万石を還納するとは、夢にも考えてはいなかった。

江戸表より、早馬が到着するや、城では、騒然となった。

二十年五月七日、城明け渡しの上使が、若松に到着するまで、信じられぬ気持ちでいた者が大半であった。

上使が到着してからの有様を、ある者は、次のように、日誌にのこしている。

御上使御下向以来相渡すべくと、式部少輔様より御書、右御両使御持参、御家中騒動、言語に絶し、日暮に及び大雨、翌日まで止まず、同七日、八日は御家中の御士中、妻子は町郷村へ勝手に御立退き、御召使いの男女、駆落ちいたし難儀のお人事に候。

そのさなか――。

ひとつの決闘が行われた。

馬廻り役六百石・高倉長右衛門は、いかにも戦国の気風を継いだ気骨のある武辺者で、刀槍ともに、一派を樹てられるほどの腕前の持主であった。

主君明成が、堀主水の出奔に、烈火の憤怒を燃えたたせて、たとえ四十万石を棒に振っても、そつ首を面前に据えてやる、と叫んだのを、是としていた。

したがって、会津加藤藩が崩壊しても、いささかも、うろたえなかった。

城明け渡しの上使が、去った翌日の宵、馬廻り役であった藩士らが十人あまり、一堂に会して、身のふりかななどを語らっているうちに、八百石をもらっていた東郷茂兵衛が、ふと、独語するように、主君の振舞いは軽率であったように思われる、と云った。

東郷茂兵衛は、沈着な人物で、平常あまり口をきかず、上下から信頼されていたので、その言葉は、重いひびきを以って、一座を押えた。

それまで、東郷茂兵衛は、主君の爲したことに、一言も批判を加えていなかったのである。高倉長右衛門は、東郷茂兵衛とは、刎頸はなげの交わりを結んだ仲であった。

「茂兵衛、されば、お主が、もし、堀主水の立場に在ったとしたならば、やはり、出奔したか？」

「あるいは——」

「茂兵衛！ 内心では、主君をさげすんで居ったのだな？」

「いや、家臣たる者、決して、主君をさげすんだりなどはしなかったが……、先君があまりにお偉かったということで、ご当主は損をされた」

「家臣として、主君を批判することは、許されぬ」

「しかし、心までもいつわることはできぬ」

「なに！」

「われらが主君であつたから、決してさげすみはしなかったが、もし、朋輩であれば、うとましく思つたろう。この気持をすてることはできぬ」

一瞬、険しい緊迫した空氣が、室内にこめた。

やがて、長右衛門が重い口をひらいた。

「お主の意見は、承服し難い。存念がある故、後刻——」

と、云った。

茂兵衛は、長右衛門の鋭い眼光を受けとめて、頷いた。

長右衛門は、帰宅すると、家僕を呼んで、たぶん今夜のうちに東郷茂兵衛が参るであろう故、お待ち申していた、と云って、書院へ通しておけ、と命じた。

東郷茂兵衛が、姿を現したのは、すでに三更をまわった頃合であった。

茂兵衛は、平素とかわらぬ態度で、

「死んだあとで、見苦しいものをのこさぬように、反古類など、とり片付けて居ったので、おそくなり申した。相済まぬ」

と、頭を下げた。

茂兵衛は、長右衛門が果し合いを挑んだのを読みとって、もし万一自分が敗れた場合のことを考え、死後のための用意をして来たのである。

「それは、それがしも気がつかない。お主、しばらく、門の外で、待っていてくれい」

長右衛門の方は、遺書だけをしたためて、べつに死後のための用意もせずにあいたのである。

長右衛門は、親も兄弟も妻子もなく、全くの孤独であった。別離を告げる者のいないことは、

気楽であつた。

どうせ、この家も、数日うちには、立退かなければならないのであつた。大方は、すでに、家僕が整理してくれていた。

小半刻ほど、茂兵衛を門外に待たせておいて、長右衛門は、酒を一杯ひっかけると、謡曲をひくくうなり乍^{なが}ら、出て来た。

決闘場所は、近所の古刹^{こさつ}の境内がえらばれた。

雲のない月夜であつた。境内の地面は、霜が降りたように白く浮きあがっていた。

対峙^{たいじ}すると、長右衛門は、

「お主と果し合いをすることになろうとは——」
と、云つた。

「さだめであらう」

茂兵衛は、しずかに、こたえた。

業^{わざ}は、互角であつた。

およそ四半刻あまり、固着状態を置いてから、猛然と斬りつけたのは、長右衛門の方であつた。茂兵衛は、その一撃をはじきざま、薙^なぎあげの反撃をあびせた。手ごたえがあつた。

長右衛門は、左手をダラリと携^かけて、隻腕青眼をとつた。左手の指から、したたる血汐が、